

# フレールベル先生の遺跡を訪ひて(三)

フレールベル館副社長  
法學士、文學士  
高市慶雄

カイルハウ Kellian

翌朝——十一月十一日——ニッカー・ボッカーに輕装してプランケンアルヒを立ち、朝霧を衝いて、單身山越三里の道を、徒歩でカイルハウへさ向ひました。プランはすっかりブリューナーファー博士が立て、下さつたのです。



(ウハルイカ)臺計時のルベールフ

角一つの教育所を建て、人の子の教育者としての事業を初められた地で、今日もなほ「フレールベル學園」に呼ぶ立派な學校が現存して居ります。「フレールベルの時計臺」に名付けらるゝ、時計塔のついた一棟の建物が先生の手によつて建てられたもので、其の他の堂々たる校舎は、何れも其後に増築せられたものであります。然し、私が三里の峻嶮を攀ぢて此の地を訪うたのは、決してこの建物を見る爲めではありません。此の學校に校長として、今なほ子弟の教育に献身せらるゝウエ

ヒター博士 Dr. Wächter の御警咳に接するのが目的であります。博士はフレール先生の血縁としての唯一の現存者で、フレールの姪の曾孫に當らるゝお方です。この學校に小學校及び中學校程度の教育を寺小屋式方法によつてやつて居る所で、長きは十年位も、同じ生徒を教育します。生徒は獨逸の各地方から、恰く博士の令名を慕うて集つて來ます。勿論全寄宿制度で全體主義的の全人格教育です。德育、體育の指導訓練に重點を措いてはりますが、さりとて知育方面も決して看却されて居る譯ではなく、物理、化學、博物教室の施設の如きも堂々たるものです。寺小屋式は、教育の方法を指すので、その設備が寺小屋の如く貧弱なるの意味では決してありません。否、寧ろ、此の山奥にかゝる堂々たる建物があるかき、少なからず喫驚したのであります。目下生徒の數は一一〇人、先生十二人、この村落の全人口二〇〇、その中學校關係者一二〇人といふ有様で、このフレール學校の他には何にもないといふ様な寒村です。こんな所に學生を託すれば洵に安全で、カフェー等に行くには、少くも一日がかりで山越で行かねば行けません(笑聲)。然し自然の環境は得も言はず美しい所で、さすがにフレール先生なる哉ミ感嘆これ久しく致しました。

こゝにフレール先生の肉筆の書翰約二百本程保存せられ、研究者の爲めには無比の貴い資料たるを想はしめます。また先生の主著「人の教育」の大部分は、こゝで脱稿したものだ相であります。こゝには亦、フレール先生の美事な彫刻のある記念碑、先生の最もよき共勞者ミッデンドルフ、ランゲタール及びバロップの墓があります。私は校長ウエヒター博士と共に裏庭の丘のその墓に詣で、記念撮影を致しました。私は古文書を獵つたり、無邪氣な子供達に木登り等をして遊んだりして、永からぬ秋の日を最も愉快に過す事が出来ました。別れに臨んで、博士は非常に名残を惜しまれ、記念にミで、フレールの最も古い肖像版畫に、自ら一篇の詩を書き、署名して私に下さいました。

次いで翌朝、馬車を雇ひ、落葉散り敷く木曾路に似たシュワルツァタール溪谷を上つて、フリーベル先生の生誕の地オーベルワイスパッハを訪れました。海拔二千尺、山の上の一小村、こゝに先生の生れた家は在りし日のそのまゝの姿で残つて居ります。先生は御存知の通り一牧師の子として生れたのですが、其の家は今も尙ほ牧師の家に使はれて居ります——血縁はもこよりありませんが。今の住み主はベラーマン Bellermann を申し、結婚した許りの若い牧師です。私を珍らしい遠來の客であるこいふので、下へも置かぬ歓待振りです。これが先生の呱呱の聲を揚げられた室である、これが先生の出生を誌した過去帳である、これが先生の肉筆の書翰である(二本あり)、等こゝ々々丁寧に案内して見せて呉れます。若い奥さんの御愛嬌も一入です。

古いお寺の過去帳の、一七八二年の條に、左の如く誌されてあるのを慥かめました——

Fröbel/Friedrich Wilhelm August, mein, des Zeigen Pastoris 5<sup>tes</sup> Sohn, geb. d. 21 April, als Domin,

Jubilate geb. d. 23 ej Pathe: (四人の氏名)

(フリーベル——フリードリヒ、ウィルヘルム、アウグストは、われ、即ち時の牧師の第五男として、四月廿一日生誕、以下四人を保證人(代父)として、同廿三日主の祝福に生る(洗禮を受けた事)。

これによつて先生が、一七八二年四月廿一日この家に呱呱の聲をあげられし事明確であります。

先生の御生家のすぐ前に立派な教會堂があります。これは一七七九年、先生の嚴父ヨハン・ヤコブ・フリーベルが村人の爲めに建てたものであります。又生家の裏の小高い丘の上に「フリーベル塔」こいふ高い塔が立つて居ります。こゝは先生が少年時代に家庭が面白くなくて、この丘の上に登つて瞑想に耽つたこいはれてゐる所であります。この塔に登りますと、先生の郷土オーベルワイスパッハの山河が一眸に收めらるゝのであります。私は星屑またゝく此の山村に一夜を明か

し、遂にフレーベル先生の往時を偲んだ事でありました。

シュワイナ・リーベンシュタイン Schweina Ⅱ Liebenstein

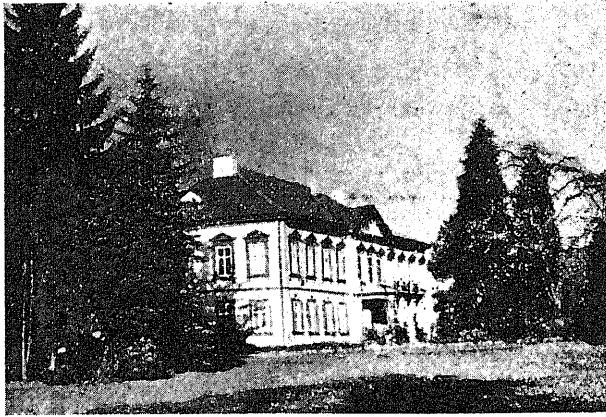
次いで翌日、先生の前半生を費されたシュワルツァートル溪谷地方を去つて、先生の第二の故郷たるシュワイナ・リーベンシュタイン地方へ向ひました。途中道順で、アイゼナツハ Eisenach に一泊しました。この町のかたは、こりなるワルトブルグ城は、嘗つて獨逸の宗教改革者ルーテルが立籠つて、新教運動を指揮するに共に、聖書を始めて獨逸語に翻譯したきて、西洋史上有名な所です。ルーテルの居室や椅子テーブル等も瞥見しましたが古く黒ずんで、簡素を通り越した粗末なものであるのに一驚しました。

フレーベルの故地、シュワイナ、リーベンシュタインは、こゝから支線に乗換へて奥地に入るので。前述のシュワルツァートル溪谷地方が、先生の誕生、修練、苦闘の地であるといふならば、後者なるこゝは先生の晩年大成の地と申すべきでせう。カイルハウ、ブランケンブルヒに居つた時分の先生は、無援孤立、經濟的にも相當に苦勞せられ、剩さへ夫人を喪つて人生の哀愁に沈淪せられたのでありましたが、第二の土地に移り來つたフレーベルは、權力と金力との後楯を以て、力強く立上る一個の闘士であり、一世の指導者でありました。即ちフォン・マーレンホルツビュウロー男爵夫人の知己を得られた故であります。その上に、ルイゼ・レーヴィンといふ若くして美しい第二の伉儷を獲、事業上の發展と家庭の幸福とを併せ持つ、平和にして輝やかしき晩年の地でもありました。

私は先づ、高燥の地に建てられたアルテンシュタイン城趾 Altenstein Schloss を訪れました。さ迄宏莊ではありませんが、典雅にして清麗なる感じの近代造りで、城前の泉水は、昔のまゝに残つて居ります。こゝは男爵夫人の別墅であり、またフレーベルが屢々保育上の會合を催した所です。

次に Bildungsanstalt と呼ばれる、フリーベルの幼稚園、保姆傳習所兼住宅であつた由緒ある一つの建物を訪問しました。リーベンシュタインより程遠からぬマリエンタールの丘、こんもり茂つた杜の梢を透して、白壁の壁が、折からの烈

日に輝いて見えました。室数は二十もありますか、相當堂々たる建物で、昔は一個の城であつた相です。これ亦マーレンホルツビュウロー夫人の斡旋による事申す迄ありません。先生は晩年此の建物に籠つてその抱懐する理想の實現に努力せられたのであります。一八五二年六月廿一日、七十



(ルートンエリマ)家の馬終生先ルペーレフ



(ナイワユシ)墓の生先ルペーレフ

歳の天壽を全うして、先生は此の家の二階南向の角部屋で、平和なる永遠の眠りに就かれました。

「余は最後の一瞬まで自然を楽しみ見て居ります」を繰返へしつゝ。(こゝは今ある工場主の住宅となつて居ります)

先生の墓標は、シュワイナの広い共同墓地の中に在ります。球ミ圓筒ミ立方體ミより成る恩物の墓碑、それに先生の美事なプロフィールが銘刻してあります。私は傍の百姓家から、一本の小さきマロニエの樹を購ひ、墓前に記念植樹をなし、合掌して、世界教育史上に於ける英靈の冥福を心から祈つた事で御座います。墓守にきいて見ますと、訪れ詣つる人も稀な由で、地軸の彼方から、はるく慕ひ來つたこの異國人を、奇しくも珍らしき者ミ見なしてか、一緒に植樹の事等を手傳ひつゝ、ある限りの歓迎の言葉を述べて呉れました。

この賤しき墓守の歓迎は、嘗つてロンドンの、巴里の、伯林の、またローマの、貴顯紳士の歓迎の辭にも幾倍勝つて、嬉しく私の胸奥を打ちました。

この墓地から一步轉じて、遙か十數町の彼方、マリエントールの小高い丘の茂りをバックミして、古い一つの碑の如きものが淋しく立つてゐるのを發見しました。同じく球ミ圓筒ミ立方體の恩物型です。„Kommt, lasst uns unsern Kindern leben.“「來れ、子等ミ共に生きん



墓碑銘のルーデル先生の横顔

哉「いふ、先生々前の名句が、かすれくゝに讀まるゝも床しい。これこそ、先生の歿後、先生に私淑した貧しい一石工の篤志」によつて出來た最初の墓標であつたのです。南向のなだらかな傾斜の芝生ミ白樺の木立、見はるかすチューリッゲンの山ミ丘、小春日の香はしき微風、所は聖母マリヤの谷マリエンタール Marienthal、ここぞ先生の生前、「馬鹿親爺」ミ村人に罵られつゝ、子供ミ戯れ遊んだミ謂はるゝ、記念すべき地點であります。私は低徊去るに忍びず、恩物の碑標に腰



(墓の初最のルベールフ)標碑の物恩

打かけ、そのかみの事、様々思ひ廻らしつゝ時の過ぐるを氣附きませんでした。フト頭を擧ぐれば、赤陽まさに山の端に没せんとし、木枯の音頃に騒がしく、寒さが肌をさす様に感じましたので、急遽リーベンシュタインの宿所へ引揚げました。

シュワイナにはこの他に、フレーベルの方式に則る「フレーベル・ハウス」いふ幼稚園があり、保姆養成所も附設せられて居ります。ブランケンブルヒのそれには多少見劣りしますが、この片田舎に中々立派な設備であるこ

感心しました。

#### フランクフルト・アム・マイン Frankfurt am Main

フランクフルトもフレーベル先生は關係の深い地です。即ち先生が二十三歳にして、始めて教師となり、育英を以て學生の事業せせんとの固い決心をかためられた所で、スキスの積學ベスタロッチと關係の生じたのも此の地からです。私は市の郊外の小公園ホルツハウゼン・パークを訪れ、その池の中に建つてゐる古風な三階建の宮殿風の建物を發見しました。これは一八〇七年から二ケ年間、先生がこの地の大名ホルツハウゼン公爵 Holzhausen の二人の子弟を預つて教育した所です。この朝名物の霧が深く垂れて、道行く人の姿もさだかには見え兼ねる中に、この城のみは周邊の池面に反映してかクッキリ浮いて見えて居りました。池には白鳥の番らしいのが浮んで、靜感そのものゝ風情で御座いました。「如何

なるフレーベル傳にも、このホルツハウゼン城址の寫眞は載つてゐないのだから、是非寫眞を撮つておく様にこのブリュールファー博士の御意により、拙き腕を揮つた譯ですが、折からの霧に妨げられて、充分の結果は得られませんでした。

私はこれより學都ハイデルベルヒに出で、マインツより川船に投じてライン河を下り、名高いローレライの岩角を右に見て、コブレンツ、ボン、ケルンを経、恙なく伯林に歸る事が出来ました。

私は此のチューリッングンの美しい自然に抱かれ、その環境を見、その人情に接して、始めてフレーベル先生の人となり、事業、思想ミを感受する事が出来た様に感じました。殊に何故先生が子供の教育所も「幼稚園」Kindergarten といふ名稱を附せられたか、また何故植物發育の原理を幼児教育に應用して理論を立てられたか、等を、樹木の美しく繁茂する獨逸のこの「緑の心臓」に來つて、始めて如實に體得實感するを得た様に感じました。

かくして約十日間を費し、フレーベル先生の遺跡を限なく探るに共に、獨逸の秋の田舎を滿喫する事が出来ました。獨逸は目下文字通り非常時で、戦時氣分横溢する中を、日本人未踏の、人里遠き山路を旅し、時には少からぬ危険にも直面しつつ、幸に事なきを得て無事ベルリンに歸還するを得ましたのは、洵に僥倖さも申すべく、これ一に我が熱誠なる江湖幼児教育諸君の御後援による事ミ 感激措く能はざる次第で御座います。(終)